

シンポジウム報告

第11回アジア太平洋州畜産学会報告

花田 正明

帯広畜産大学畜産科学科

第11回アジア太平洋州畜産学会が「持続的家畜生産における新たな問題と課題」をテーマに、2004年9月5日から9日までマレーシアの首都、クアラ・ Lumpur のホテルニッコウで開催された。大会は基調講演、全体会議、サテライトシンポジウム、口頭発表、ポスター発表から構成されており、以下にそれぞれの内容について簡単に紹介する。

基調講演・全体会議

基調講演では、先ず台湾の Chou and Hsia が「Sustainable animal agriculture in the new millennium, 新世紀における持続的家畜生産システムの確立の重要性と確立のためにさらなる研究と教育の重要性を論じた。次に韓国の Han and Ha が「AAAP: A retrospect of quarter century and the way ahead, AAAP: 四半世紀の回顧と将来展望」と題し、これまでの AAAP の活動経過について述べるとともに、今後、未加盟国の加盟促進などを通して AAAP をより強固な組織にし、アジア太平洋州地域の畜産の発展に対し今まで以上に貢献していく必要性が報告された。

全体会議は、①畜産における新技術、②熱帯酪農、③食の安全と持続的食糧生産、④飼料と飼料給与、⑤家畜とそれを取り巻く環境に分かれており、各々2ないし3題の発表があった。①畜産における新技術のセッションでは、遺伝操作された家畜の畜産物の安全性の評価方法、家畜栄養学研究における新技術、家畜排泄物の処理技術、周辺環境への負荷軽減のための栄養管理技術の発表が行われた。②熱帯酪農のセッションでは、アジア地域における乳製品の消費拡大と熱帯酪農の課題、持続的酪農生産のための地域飼料資源の活用、暑熱条件下における乳牛の管理について話題提供がなされた。③食の安全と持続的食糧生産のセッションでは、畜産業における食の安全性確保のための課題、畜産物に対する需要の拡大と変化が環境に与える影響、養鶏産業における新たな感染症について論じられた。④飼料と飼料給与のセッションでは、世界における雑穀類の生産と需給概況、パーム油ならびにその精製副産物の飼料利用についての発表があった。⑤家畜とそれを取り巻く環境のセッションでは、家畜福

祉を考慮した生産システムによる経営収益の改善、農業地域におけるアルカリ土壌の修復に対する家畜の役割、現代社会における愛玩動物と野生動物の役割について話題提供があった。

サテライトシンポジウム

サテライトシンポジウムでは、①家畜生産における遺伝子組み換え技術、②集約的畜産と環境問題、③熱帯酪農の3テーマで行われ、アジア地域における畜産の集約化や牛乳生産の急速な拡大にともなう問題に対する関心の高さが伺われた。①家畜生産における遺伝子組み換え技術では、LCA (Life Cycle Assessment) により GM 作物の優位性・重要性を示し、家畜生産における GMO 導入による環境負荷の低減を図るべきであるとの話題提供があり、国際生命科学研究所 (International Life Science Institute) が示した GM 飼料作物を評価するための畜産研究の指針が紹介された。また、遺伝子組み換え技術により作出した害虫 (Asia cornboder, とうもろこし生産量を 30~50%低下させる) 抵抗性のあるトウモロコシを肉用鶏に給与した結果、飼料効率などの成績は既往品種給与と同等であった (フィリピン)、 β -glucanase 遺伝子を組み込んだ乳酸菌を育雛に給与した結果、エネルギー消化率や飼料効率が増加した (マレーシア) とのケーススタディも報告された。②集約的畜産と環境問題では、家族経営から企業経営へと急速に畜産物の生産形態を変化しつつあるアジアの諸地域では環境汚染や公衆衛生など様々問題点を抱えるようになっており、早急な行政的かつ技術的対応の必要性が提言された。また、畜産業の集約化が周辺環境に及ぼす影響の把握やその制御方法さらには畜産業ガイドラインと環境管理システムの改良に向けてオーストラリアで実施されている研究の紹介、糞尿の処理過程において高温・好気性細菌などの増殖促進を通して発酵処理を促進させる機能を有した細菌 (機能性細菌) の存在や GIS を活用した養豚場からの窒素の環境汚染の評価方法などについて話題提供があった。③熱帯酪農では、暖地型牧草や熱帯気候に適應した乳牛の利用によるオーストラリア北部地域における競争力のある牛乳生産システムの開発、約8万戸存在するインドネシアにおける小規模酪農家の牛

乳生産システムの改善方法、栄養管理および暑熱対策の改善により乳牛の乳量および繁殖成績が向上したというマレーシアでの事例、東南アジアの小規模酪農家の現状と課題などについて話題提供があった。

一般講演

一般講演は口頭発表とポスター発表に分かれて行われ、口頭発表は、酪農生産、育種・遺伝・繁殖、養豚、生産システム、飼料生産、畜産生物学、草食動物管理・集約的畜産、家禽栄養、反芻家畜栄養、反芻家畜の生理繁殖、反芻胃内生理と生態、反芻家畜への飼料給与、家禽生産、家畜生産の14分野に分かれて行われ、合計140題の発表が登録されていた。一方、ポスター

発表は、酪農生産、育種・遺伝・繁殖、家禽生産、単胃家畜生産、畜産生物学、乳・肉製品、反芻家畜への飼料給与、家畜生産と環境の7分野に分かれて行われ、合計217題の発表が登録されていた。

これらの発表の内容は、Proceedings of the 11th Animal Science Congress, volume 1-3, The Asian-Australasian Association of Animal Production Societies, 2004.に掲載されているので、詳しくはこのプロシーディングスを参照されたい。なお、マレーシアでの開催は1980年の第1回大会に続き2回目であり、次回のAAAPの開催国も1985年に第3回大会を開催した韓国での実施が決定されている。日本で2回目の開催をする日もそう遠くではないかと思われる。